
素庵日記

春野一人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

素庵日記

【NNコード】

N5504X

【作者名】

春野一人

【あらすじ】

春野一人（素庵）の日記 つれづれなるままで、日々の良からぬ事を書きしるせり。一種のゴミ箱、パンandlerの箱。悪臭あり、要注意！

11年10月13日

2011年10月13日 木曜日 それでも、暑い日がたまにあ
る。昨晩、日本テレビ、夕方のニュース番組「エブリー」に、素庵
め登場。信州妻恋の高原のキャベツ畑で、わが恐妻に愛を叫ぶとい
う、おぞましい画面が繰り広げられました。素庵、ちょっと太めだ
が、わが愚妻の友、曰く「かつこいいじやん」に愚かな素庵、たち
まち気を良くする。しかし醜態が展開するのではという思いで緊張
したのであろうか、疲れ果て、お子様就寝時間の午後八時に寝てし
まつた・・・。

さて、カルカヤの歌を書き終えたあと素庵こと春野一人は毎日酒
に溺れ、女を追いかけ回し・・・と、言うことでもなく、次作は歴
史小説の予定なので、あらすじ、登場人物、時代のイメージを、下
手な字でノートに書き散らしているところなのであります。必ずや
近々に、再登場しますので、乞うご期待！

先日は、映画、「猿の惑星・創世記」を見ました。前作「猿の惑
星」「続猿の惑星」は名作でしたが、今度の新作も見応えのあるも
のでしたな。

11年10月14日（金）晴

10月14日 厚生労働省は10月11日の社会保障審議会（厚労相の諮問機関）の年金部会で三つの案を提示した。厚労省は年内に改革案を取りまとめる予定だという。三つの案と言つのは、？厚生年金の支給開始年齢を3年に1歳ずつ引き上げるというスケジュールを「2年に1歳ずつ」に前倒しして、65歳に引き上げる。？厚生年金を65歳まで引き上げた後、基礎年金も支給開始年齢を3年に一度引き上げて、最終的には68歳支給開始とする。？2年に1歳ずつまえ引き上げを早め、さらに2年に1歳ずつ引き上げて、基礎部分も含め68歳支給開始とする。

これに先立つ、六月の民主党の社会保障に関する論議では70歳までの引き上げに言及した論もあつたと言つて、

「やつした正に逃げ水といわれる、詐欺まがいのことが、いつも易々行われる事に素庵は怒りを感じる。

こんな事では、年金に対する国民の信頼は低下する一方ではなかろうか。財源が足りないと言つことで、このよつた論が、慎重な国民的議論もなく発表されて良いものであつつか。やはり民主党もだめだ。

久々の雨模様。震災による原発の駆動停止により、妻の仕事が日産関係のため、土・日出勤になっていた。それで私の土・日の休日とあわず、夫婦すれ違ひ休日となってしまっていた。十月に入り、やっとその魔法も解けて、仲良く（！）休日が一緒になった。

一人連れだつての遠出も三ヶ月なかつたので、今日は田帰り温泉行である。常磐道・谷和原ICより車で10分の「きぬの湯」^{やわらぎ}が目指す場所である。入浴料は土・日1200円（回数券利用で千円）。源泉かけ流しの塩化物質泉・36.6度・毎分229㍑・黄色を帯びた透明な泉質は東北に多い、非常に和む香りを持つていて良いグレードである。東京から車で30分で、この良質な温泉に会える事は貴重と言える。施設も広々と綺麗で、妻はボディケア・足足マッサージ込み一時間6000円で

強固な疲れが抜けたと満足のよつす。えびす生ビールは香り高く・こだわりの料理も旨く・ボリューム・お値段は納得のもの。又、嬉しい充実した産地直売コーナーもある。周辺は筑波エクスプレスによってできた新造の住宅が散在して、若干郊外の住宅地という感じだが、広々とした感じは消えていない。駐車場は230台と余裕があるが、電車で行くなら常磐線＆筑波エクスプレス守谷駅から要予約で送迎バスがあるそうだ。電話は0297-20-3751である。

10月18日(火)

10月18日(火) 日曜日、例によつて「ちい散步」をする予定だつたが、なんと30度近い、真夏日。なまくら素庵は、さつさと戦線を撤退し、シネコンに逃げ込んだ。シネコンで田についた「ツレがうつになりまして」を見るにした。この作品は細川貂々『ほそかわてんてん』の原作で、これは鬱病になつた夫、望月昭々との鬱病記をイラスト付で描いて2006年にベストセラーとなつた幻冬舎刊「ツレがうつになりまして」の映画化だという。監督は人情劇に定評がある佐々部清。暗い話なのかと思つたが、タイトルのおかしさを裏切らず、暖かい映画に仕上がつていた。この映画には忘れられない良い言葉がたくさん転がつていて春野一人のペンネームで作品を書いている素庵に切り込んでくる言葉があつた。売れない漫画家である、ツレの妻は、職場の親しい上司にこう言われる「あんたは、あんたが書いてる作品が本当に面白いと思って書いているかね? そのよう漫画が人を引きつけると思うかね?」そこでツレの妻は書くべき作品のヒントを得るのである。素庵も突然春野になつて、そうだそだとこのシーンにうなずいてしまつたのである。結論、この映画は過酷な企業社会の荒野に咲く、癒しの美しい花である。

10月19日(水)

仕事の後、午後六時過ぎ、市立図書館に日本書紀と白村江を扱った2冊の本を返した。読むのに時間がかかったので、返却期限を過ぎてしまった。さて、今度は「日本書紀は独立宣言書だつた－明かされた建国の謎－」 山科誠著 昭和20年 金沢市生まれ 慶大経済学部卒 昭和42年小学館販売を経て昭和44年バンダイ入社 昭和55年同社代表取締役就任。角川書店平成八年刊。二冊目は、吉川弘館・・・いつも資料としてお世話になりますなあ、現代語訳吾妻鏡は良かつた！・・・歴史ライブラリー229の「古事記のひみつ・歴史書の成立」平成十九年刊 三浦佑之（昭和21年三重県生まれ。昭和50年千葉大学院人文社会科学研究科教授。著書に「語訳古事記・万葉びとの「家族」誌・等。三冊目は「日本書紀のすべて」新人物往来社平成3年刊 武光誠著（本に著者略歴なし。素庵調べ・1950年生まれ・日本史学者、明治学院大学教授。山口県生まれ。東大大学院国史学専攻、1980年明治学院大学に勤務。2008年東大博士課程を修了「古代太政官制の研究」で文学博士、明学大教養教育センター教授となつた。およそ200冊の著書があり、研究者として知られている）

まさに、さまざまな人が古代史の解明に取り組んでいるのだなあと思う。素庵も虎の威を借る狐として、のこのこついて行くことにしよう。

そのほか、日本書紀の研究書である「釈日本紀」「日本書紀私記」を予約して帰宅した。夕飯は、ブリの煮付け、なめこ味噌汁、レタスのサラダ、発泡酒350㎖1缶である。

10月20日(木)

東京は20日から突然冷え込んだ。山の神に、ブレザーを着て行けと言わっていたが、素庵、南方系なのに（本当にそうであろうか・・・母の父は富山の百姓の末っ子であったから、神田のテーラーに丁稚でつちとして上京した人で、私の性格、体质は、その祖父に似ているらしい。これで言えば、むしろ出雲に多い、新羅系統の血を受けているかもしれない・・・だから北方系なのかも知れない。父方は鎌倉時代から川崎の多摩川に面した幕府の重要な城があつたところに居を構えた一族のようで、鎌倉幕府をもり立てた稻毛氏臣下の関東武士団の一派であつたと思われる。しかもチジレ毛で鼻がでかいアロハ民族のようであるから、黒潮に縁のある血筋ではなかろうか。父、母の母についてはともに不詳である）寒さには強い。シャツの上に、ポロを着ただけで一日すごした。仕事の他は、歴史書・歴史書に埋もれている。新しい話のためのあらすじもまだ、まとまっていない。日本書紀と古事記の並立というミステリーを追いかけていく段階であるからだ。この謎が解けないと話が始まらないのである。（書く小説については謎のままに残しておこう）

今日は朝から雨である。図書館から借りてきた歴史本三冊にやつと田を通し終えた。三冊中、取るべき著作は「古事記のひみつ」三浦佑之著 吉川弘文館刊であった。真摯に古事記と日本書紀を比べ、独断に入り込みず、よくあるトンデモ本にならず、まさに「古事記」を分析した優れた著作と思えた。「日本書紀は独立宣言書だつた」 山科誠著は、すごい独断で、推論の進め方には優れたところが見えるが、なにしろ独断が多すぎて、ほとんどトンデモ本化している。参考にはなりえないと思えた。「日本書紀のすべて」 武光誠編 新人物往来社刊は、いわば広く浅くの本、十人の人達による、日本史入門書といったところだ。竹光氏の担当はわずか20ページあまり、「日本書紀と古事記も同時期に並立しているが、古事記も朝廷に必要な書であった」と簡単に片付けられてしまっている。200冊に及ぶ著作がある学会では著名な先生であるらしいが、首を傾げてしまう研究態度ではなかろうか。

さて「古事記のひみつ」により、素庵の愚鈍な頭も整理されて、少し前に進むことができた。三冊の本の前に借りてきた本の名を記さなかつたが、その一冊は「日本書紀の謎を解く・述作者は誰か」森博達（もり・ひろみち）（1949年兵庫県生まれ、大阪外国语大学中国学科卒。名古屋大学大学院博士課程（中国文学専攻）中退。愛知大学専任講師、同志社大学助教授、大阪外国语大学助教授を経て、1999年に京都産業大学教授）は日本書紀に用いられている言葉によつて、著述者を推理する方法を探つていて。それによつて、書記の各巻が、中国人の手によるものか、日本人によるものかを、見事に分析している。小耳にはさんだ話によると、この著は名作で知られているといつことである。

1)のよにして、謎は徐々に明らかにされてきているが、道は未

だ遙かに遠い。素庵が日本古代に強く惹かれるのは、謎が多いからである。さらに日本書紀が謎かけ問答をしかけてくるから余計面白いのである。・・・今は古い小説になってしまったが「成吉思汗の秘密」たかぎあきみつ 高木彬光著 昭和35年 光文社刊 は、歴史マニアには心躍る名作であった。なにしろ源義經が元初代皇帝ジンギスカンであると言つことを、入院中で閑な東大法医学助教授が論証するという話であり、その論証が、若き素庵にはたまらなく面白かった。この土日はこれを再読したいと思っている。

高木彬光 1920年青森市生まれ1955年没の推理小説作家。四代続く医者の家系。東大進学に失敗、京都帝大工学部冶金学科卒。一高在学中、家は破産して一家離散、親族の援助で学業を続けた。京都大学卒業後、中島飛行機に就職したが太平洋戦争終結で失職。1947年骨相占師の勧めにより小説家をめざす。できあがつた「刺青殺人事件」が江戸川乱歩に認められ、1948年出版。代表作に「能面殺人事件」(1950年、第三回探偵作家クラブ賞)「わが一高時代の犯罪」「人形は何故殺される」「白昼の死角」「破戒裁判」

氏の歴史ミステリー「邪馬台国の秘密」「古代天皇の秘密」は、いずれも入院中の教授が謎にいどむという小説である。こうした推理小説の書き方は、ジョセフイン・ティの「時の娘」(1951年)が原型で、病院のベッドで動けない探偵が限られた情報で推理する話というの「ベッド・ディティテクティブ」とよばれてい。

氏はかなりユニークな人で、易、占いを信じていて、手相の本として「手相占い」昭和56年角川文庫がある。また大学で学んだ治金の知識を生かして、秋田で鉱山の発掘に熱中したという(鉱山士の事を山師とも言つね!笑い)。この手相の本は、素庵も愛読したが、今日の日まで氏の著作と知らなかつた!似た名前であるなとは思つていたのだが・・・(苦笑)。

今日は、「ちい散步」入谷界隈に従つて散歩すべく昼前にJR上野駅に降り立つた。しかし外に出てみると、降りしきる雨。意気地のない素庵夫妻であるから、早速、計画撤回。上野駅で昼食ということになつたが、あいにくほどよい食事どこの見つけられず、東京駅に行こうと言つことになつた。そして東京駅は構内北側の「キッチンストリー^ト」（食事どころが集まつてゐる）の明石たこ焼き店「にしむら日和^{ひづか}」に入り込んだ。お通し200円×2オム焼きそば1000円×1・明太チーズ餅、お好み焼1000円×1・明石たこ焼き950円×1・キリン瓶ビール・梅酒ソーダ割り・明石鯛（清酒）1合弱×1・漬け物、ぬか床30年もの550円×1を食べる。家に帰つてネットでの店の評判はかんばしいものではなかつたが、お新香は絶品！日本酒明石鯛（たぶん純米酒、今度行つたら聞いてみたい）が薄く黄色みかかつた、濃厚な江戸時代的な良い酒、焼きそば、お好み焼も非常に美味しかつた。二人はカウンターの前で勝手なオダをあげたが、焼手の60代と思われる、下町風おばさんも、おじさんも、ほどよい客あしらいで心地よく酔うことができたのであつた。鯨焼とかキノコ五種焼とか煮ごごりなど皿そつなおつまみもある。銀座店もあるというので今度行つてみようと思う。さて、読んでいる「成吉思汗の秘密」大変面白い。日本国史大系8（日本書紀私記・釈日本紀・日本逸史）B5サイズで厚さ10センチで全て漢字！を借りてきた。鋭意解読しなくては！（汗）

朝方二時に目が覚めて、七時までに「成吉思汗の秘密」を読み切った。義経が成吉思汗になつたという大胆な設定ながら、考証を見事に固めている。まさに、こうした質の高い考証は近頃のトンデモ本の作家の遠く及ばないところである。主人公の神津がマルコポーロの「東方見聞録」の書中に気になる記述があることを以下のように紹介している。

元の皇帝フビライが成吉思汗から聞いた話としてマルコポーロに伝えた。

成吉思汗が若い頃、ある合戦に敗北して、ただ一人フクロウが住む古い大木の空洞に逃れた。そこへ敵兵が追撃してきて、洞窟に入ろうとした兵を、成吉思汗に心を寄せる敵の重臣が、「ここには人間はおらんフクロウがあるだけだ」と押し留めた。それで彼は九死に一生をえて助かった。

この話は、平家追討に立ち上がつた源頼朝の小田原、石橋山での苦戦の経験とそつくりである（鎌倉正史・吾妻鏡に書かれている）それが「東方見聞録」に載つていることは実に不思議としか言いようがない。（素庵は石橋山古戦場に行つたことがある！伊豆の海から急に立ち上がつたミカン山といつた所である）このような驚くべき史実を「成吉思汗の秘密」は数多く搜して題材に持つてくるのは作者の努力のたまものなのである。これはただの、トンデモ本とは違う、歴史研究本とさえ言える優れた本なのである。・・・「東方見聞録」を早速手に入れて、この部分たしかめてみたい。

十時過ぎ、家を出て、「ちい散步」本郷界隈を歩いてみる。何で

も夏日とか、暑い。東大生協の食堂で、昼食。素庵は中華丼400円、恐妻は五目寿司と天ぷら・鰯焼き物のセット、550円。味、ボリュームとも納得の品だつた。・・・しかし東大の施設は実にボロである、日本国の大指折りの大学がこのような有様であるのは実に嘆かわしい。一千兆円の借金が、このような所に影を投げているだ
!・・・

それはさておき、街歩きは身体を鍛え、かつ余分に楽しめる、ちいい散歩は良い。このあたり傾いた古民家、味のある、木造の下宿屋などあり、なかなか良い。また和菓子老舗、古本屋なども多く楽し

先晩は、素庵の関係する韓国居酒屋「〇」の開店祝いで、午後6時こりより飲み始め、午前様となり我が家に帰還。そのため一日一日酔いに悩まされた。ただボウとして、本も読む気力もパソコンにさわる意欲もうせてしまつて、もう酒はやめようと固く決意した。しかし今日になると、酒はほどほどにすべきだと思っていることが変わつてしまつてゐる。まさに素庵のだらしなさがもうに出てしまつてゐる。こんな時は「相田みつお」の言葉ではないが「人間だもの」と、うそぶいていよう。

さて、図書館から借りてきた資料「日本書紀私記」「糺日本紀」「日本逸史」が、今手元にある。吉川弘文館発行、平成11年、新訂増補「国史大系」に前記三書が一緒に記載されている。素庵の調べによると、これらの書について、現代語訳といったような解釈本はないようだ。したがつて全文、漢字の原書だけが、この無学な素庵の前に所在なげに転がつてゐる有様である。吉川弘文館に恥ずかし気もなく、電話して、「もっと易しい本はないか」などと聞いてみようと思つてゐる。吾妻鏡などは良い現代語訳を出してくれている出版社だから、庶民の味方であるはずだが・・・。

さて、この本の他に、先日の一ニュース・エブリイの出場のお礼に頂いた、日テレマーク入り図書カード500円4枚で新刊小説「下町口ケット」いけじと・じゅん池井戸順著とアマゾンで買つた、例の「ベッド探偵」元祖・ジョセフイン・テイの「時の娘」が目の前に転がつてゐる。

下町口ケットは、その題名からすると、下町の工場の親父が出てきて、おんぼろい人工衛星でも飛ばす話かと思っていたが、イメージとおもいきり違う話である。しかしながら、非常にドラマチックな内容で面白い。素庵は小説のストーリーを話す奴が大嫌いで、今はなき淀川長治のテレビコメントなどは声を消して見ていた者で

あるから、ここでは、ストーリーを書くことは、控える。

10月27日(木)

「日本書紀私記」「釈日本紀」の注釈本・現代語訳は存在しないというのが、田下の素庵の結論である。厚かましいことに吉川弘文館に電話して聞いた話もある。したがって、目の前には漢文の壁がそそり立っている。(汗)。魏志、後漢書なども文庫本になつてるのは、倭国に関連した記事を取り出した、いわゆる倭人伝と読んでいるダイジェスト版のみに限られている。言うまでもないことだが、古代の日本をめぐる状況は、倭人伝だけでは決して理解はできない。

すでに、出版社の未来は陰り始めているが、ここであえて言わして貰えば、従来の出版界がひどく安易な土俵で勝負してきたということである。(ネット上にも、これらの現代語訳は存在しないように思える。どなたか取り組む人はいないだろうか)

こうした状況が、現在の歴史トンデモ本の跋扈を許していると言えよう。・・・さて、こうぶつぶつ言つている間にも、図書館から「東方見聞録」一冊用意できたと、メールが入つた。土田は、那須にモミジ狩りに(風雅なことばだねえ)出かけるから熟読はむりだろうが、楽しみである。「時の娘」「下町ロケット」は、ただ今読書中。素庵は熱烈ながらいい加減なSF好きであるから、いずれ「リングワールド」「宇宙のランデブー」「夏の扉」などなどについて「託を並べるつもり。

東方見聞録を図書館から借り、隅々まで目を通すが、「ジンギスカンが逃れて樹のほこらに隠れていると敵将が助けた」というエピソードを、見つける事はできなかつた。それで、この件に關しては、しばし判断中止。もう少し東方見聞録を読んでみようと思う。

さて、土日にかけて素庵は那須方面にモミジ狩り挙行。土曜は、比較的那須に近い大内宿を目指して車で進むが山中を通る道は三月の震災のために、至る所道が崩れており、いまだ通行不能という状態である。このため、大迂回で進み、大内宿に着いたのは昼になつてしまつた。（けれども細い迂回の山道は紅葉が見事であつた）

大内宿は江戸時代、会津若松と日光を繋ぐ会津西街道の宿場として設けられ、発展した町だ。会津藩・新発田藩・村上藩・米沢藩の参勤交代や米の運送に多く用いられたと言つことだ。明治に至つて、参勤交代もなされなくなり、寂れたが、寂れたことで、昔のままの宿場町が新築もされず昭和まで、相当残されていた。昭和56年（1981年）、木曽の妻籠宿、奈良井宿に続いて、全国第三番目に重要伝統的建造物群保存地区として設定されたのだ。

現在は、街道の両側によそ70軒の藁葺きなどの商店が軒を連ねていて、往復700?の往還を楽しめる。街道はアスファルト舗装されておらず、道の両側には清らかな一尺（60?）ほどの清らかな用水が流れている。そこでラムネやビールやトマトやリングゴが冷やされていた。素庵一行（素庵、愚妻、愚息）は街道の外れの小山から、美しい町並みを眺めた後、名物、一本ネギを箸にして頂くおいしいネギそばと、そばがき、あんこもち、地酒などに満足。宿場の周りの山々は紅葉し、休耕田のススキは陽を受けて白く波をうつておつたぞ。愚息は素庵から略奪したキヤノンキッス一眼デジカメで風景を撮りまくつておつた。素庵は地酒「特別純米酒大内宿」四合瓶一本・計三千円也を土産とす。福島県内のはこは震災で観光

客がまばらと聞いていたが、この日は大勢の人で賑わっていて、元氣で良かつた良かつた。宿泊は那須のホテル・ラフォーレで、健保組合の補助があつて、一泊一食八千円と格安、設備豪華、食事良し、湯は硫黄泉（震災以後泉質が濃くなつたという！）良しで満足。ただし翌日の予定、今年四月より公開されたご用邸の一部、「平成の森」行きは駐車場が七十台のため、待つことになり、帰路を急ぐ、我々は、予定を変更、那須茶臼岳見物に切り替えたのであった。

「下町口ケット」読了。今、企業がかかえる問題が、面白さの中にじみ出している小説であると思つた。作者 池井戸潤氏は1963年岐阜県生まれ。慶應義塾大学卒業後、三菱銀行入行、95年退職。98年「果つる底なき」で第44回江戸川乱歩賞を受賞し小説家デビュー。10年「鉄の骨」で吉川英治文学新人賞を受賞。他の著書に大藪春彦賞候補になつた、「BT」、63、「最終退行」、直木賞候補の「空飛ぶタイヤ」、山本周五郎賞候補の「俺たち花のバブル組」など。「下町口ケット」で第145回直木賞受賞した。「」のよつに注目作を多作している氏は今後も期待できる大型作家と言つべきだろう。素庵の楽しみが一つ増えたのである。

先日なくなつた、アップル社のスティーブ・ジョブズ氏の伝記が発売されたが、これなどは「下町口ケット」のドキュメント版ともいふべき面白さが予感できて、今、読みたい一冊である。

アマゾンより「元朝秘史・チンギスハン実録」届く。春野一人の日本書紀の謎に関する小説は「ベッド・デティクティブ」の形を取らうかななどとつづら思つてゐる今日この頃である。夜は恒例の会社の月末打ち上げ。たまたま社長の前の席ということで、社長と話しこむ。社長は大学時代はフランス語科と言つこと、素庵も、もとはちやちな会社の社長と言つことで、経営の話、小説の話と、楽しい一時を過ごした。

読了の「下町口ケット」は、社長に進呈しようか。ここは浜松町駅もよりの魚料理の店（店名忘れました）であるが料理は「豚シャブ・野菜」で、なかなか捨てがたい味であります。この例会は2時間飲み放題、費用会社もちの、いやしい貧乏素庵、狂喜の内容なであります。素庵はビールの後、冷酒一本で深酒なしの素庵にはめずらしい良い酒であります。

昨日は、「小説家になろう」さんの、ネットの具合が悪かったようで、アクセスできない事をいいわけに、日記を書かずじまいにしてしまった。さて、手に入れた「元朝秘史・チンギスハン実録」（中公新書・岩村忍著・1963年初版）に、例の梶原景時（相模の国の大原郷の領主）が敵でありながら洞窟に隠れる源頼朝をかばつた話と良く似た話を発見した。

テムジン（のちの成吉思汗）は敵から逃れて、林の中に逃げ込んだ。（この頃はテムジンがようやく頭角を現してきた頃であった）九日目に食物もつきて森から出たところを待ちかまえていた敵のタイウト族に捕らえられてしまった。タイチウト族を率いているタルフダイ・キリルトクはテムジンを捕らえて帰ると、部落から部落へと引き回した。時は夏の初めの旧暦四月十六日の暖かい日であったから、タイチウト族のものはオノン河の岸で宴を催し、暗くなると、みな帰つて行つてしまつた。テムジンは酒宴の間、子供の番人に見張られていたが、族の者達が帰つた所を見計らつて手枷てがせを子供の手からもぎ取つて、子供の頭を一打ちし再び林に逃げ込んでしまつた。テムジンは見つけられる恐れがあるので、河の水たまりに上向きに横たわり手枷を水に流れるままでして、顔だけを水面に出していた。子供が「逃げたぞ」と叫んだので、タイチウト達は満月の明るい光の下の、林の中を探し回つた。スルドス氏のソルハン・シラはテムジンが隠れているのを発見したが、「おまえが優れた者なのでタイチウト達は傭んでいるのだ。そのまま隠れているが良い。私は知らせたりはせぬ」と告げて立ち去つた。タイチウト達は一時はあきらめて引き返していつたが、また引き返ってきて捜そうとい出したので、ソルハン・シラは「真昼でも逃げられてしまったのに、今、この暗くなつた夜に見つかるはずがない。まだ捜してない

所を捜して今日は打ち切りにして、明日また捜そひ」と言つた。

あきれるくらい、話の細部が「吾妻鏡」に良く似た話である。まさか義経がジンギスカンになったと、それはいくら何でも、すぐさうかる話しだるが、ジンギスカンが、部族をまとめていつた様子も、頼朝の立ち上げと似ていて、背筋がゾクゾクするのである。又、日本ではジンギスカンと呼んでいるが、原典では「チンギス・ハガン」であると中公新書版の著者である古村氏は後書きに書いておられる。（氏は義経＝ジンギスカン論者などでは全然なく。原典について言及されているだけなのだ）チンギス判官？これは素庵の考えすぎであろうか。判官とは義経の代名詞である。ちなみに「ハガン」は元国においては王につく敬称なのである。・・・どうやら「トンデモ素庵」と言われそだだからここらへんで退散しよう。今日の晩ご飯はブリの照り焼き。切り干し煮物。ゴボウのきんぴら。茄漬け物。御飯軽く一膳。酒抜き。一昨日は会社の打ち上げ。昨晩は「寿司常」（東京を中心とした中級寿司チーン店）で酒と、飲み過ぎだ。昼はナチュラルローンの店内キッチンで作った、メンチバーガーに冷茶缶であった。

昨日は、文化の日で休日。早朝より「ベッド・デテクティブ・ストーリー」（しかし、この言葉は、和製英語だそうな。アームチャード・デテクティブが正式な呼び名であるといつ）の元祖と言われるジョセフィン・テイの「時の娘」を読んでいた。英國王リチャード三世は、王位に即くために、兄の幼い王子を塔に閉じこめて殺した極悪非道な王として知られているが、彼の肖像画を見た、入院中のグラント警部は

その肖像画が示している優しさに疑問を感じて、考証をはじめるという話である。この話のパターンが、「成吉思汗の秘密」で用いられている訳なのだが、この手法は、あまり用いられてないのである（一番積極的だったのは「成吉思汗の秘密」の作者、高木彬光氏だつた）。素庵、この手法を用いて、数々の歴史小説連作の創作にとりかかりたいと思うこの頃である。高木氏はこのパターンで書いた小説「邪馬台国の秘密」「古代天皇の秘密」があるが、これらはアマゾンで送料込みで300円程度で手に入るので、早速注文した。そのほか「ダ・ヴィンチ・コード」（著者タン・ブラウン。全世界で七千万部、日本で一千万部を突破した！2006年映画化。しかし素庵思うに、これはトンデモ本の最たるものであると思うのだが未読で、はつきりしたことは言えない）

そのあと素庵、自転車で床屋（1600円）に行き、それから要介護3の認知症の母のいるリハビリ施設にも回ってきた。午後からは夕食の買い物。出戻り男の長男の分も含めて三人分の準備である。メニューは牛ステーキ・鯛のカルパッチョ・サラダ・キムチ・サザエの壺焼である。

四日は仕事。以前肉の配達で知っている、東日本橋の肉屋兼弁当屋の遠藤商店で夕食の弁当500円を三食求める。昼時は近所のサラリーマンが列を成す、人気店である。大盛りの御飯に五品のボリ

ユームあるおかずが三十種の中から選べるのである。素庵はメンチカツ・ハンバーグ・マー婆豆腐・キンピラそれに必ずつく白菜のお新香を選んだ。夕食時このほかにトウモロコシ醤油バター炒め、トマトサラダを添える。・・・この日も「時の娘」を読んでいる。仕事で新木場に行くが、貨物船が停泊する港にススキの群れが銀穂を光らせて良き秋の風情であった。

息子が、素庵のフィルム中型カメラの名機「ハッセルブラッド」を使うというので、使い方を教えて渡したが、結局シャッターが落ちないという事になり、素庵にも原因がわからない。「ハッセルブラッド」は、言うなればカメラのスーパーカーのようなものであるから、致し方がない。これに比べれば現在のデジカメ一眼は、まさに日本車の良さを引き継いだ、無故障の権化と言えよう。「ハッセルブラッド」を修理に持ち込めば、安くとも五万円はくだらないから貧乏素庵には手も足も出ない。ここは、「こりやだめだ」と言って、カメラをほつたらかしにするしかないのである。これに比べれば、もう一台持っている一眼中型カメラ、国産のマミヤC200はトラブルもなく扱いやすい。しかし「ハッセルブラッド」のレンズはかのドイツ製「ツアイス」であり、取れる映像は、フィルムにしてデジタルで言えば3万画素はあると思われる所以惜しい。

さて今日は、鎌倉の御成通りの老舗酒店「高崎屋」さんに頼んであつた、秋田の名酒「純米吟醸新政」あらわせ 4合瓶2千円なり1本を求めに行く。新政酒造発祥の六合酵母による酒を生酒でいただくどんな美味であろうか、いまだ栓を切つておらず、楽しみな素庵である。ついで甲府のボジョレーとも言うべき、マスカットベリー種を用いた中央葡萄酒株式会社（グレイスワインで知られている）のセレナ赤ワインを1500円も勧められるままに求めた。おりしも北鎌倉駅前の北鎌倉古民家ミュージアムにて童の愛くるしい人形で知られる粟野敦子創作人形展500円に入り、その可愛さ、懐かしさを堪能した。このミュージアムの庭もなかなかの風情ある良い庭である。その後、小町通りの甘味どころ「納言」と「天むす屋」両店に立ち寄り満腹。どちらも名店なり。

さて、ベッドディテクトを検索するつち、エドガー・アラン・ポーの「モルグ街の殺人」が史上初のミステリーと知り未読なのでア

マゾンに注文を入れる。又、コナン・ドイルのシャーロック・ホームズ、シリーズの一つ「まだらの紐」も評判良いというので注文入る。ミステリーは歴史ミステリーの父親みたいな存在と思うからである。今日「ダビンチコード」角川文庫・上・中・下、三冊入手。

昨夜、テレビ「アドマチック天国」は、板橋の「ハッピーロード大山商店街」を取り上げていた。昨日放送された内容に引きずられて「大山詣」おおやまもうでは、ちょっと恥ずかしいが、なに素庵もともとミーハーであるから臆する所なく、参上した。この大山の地名は、この場所がかつては、大山詣をする大山街道が通りていたからであるとう。近所の埼玉に抜ける国道17号（中山道）の志村の坂道には未だに古い石の道しるべが立っていて、「ここより大山街道」と刻まれているという。なんでここが大山街道？と疑問の素庵であつたが、調べてみると、「大山街道」は、かつての「鎌倉街道」と同じで、丹沢の大山に通じる多くの道を「大山街道」と呼んだとある。これで疑問氷解。数多くの「大山街道」のひとつなのである。もとより、大山商店街を通る川越街道が「大山街道」ではなく、その道筋は今は失われて不明である。

大山商店街はおよそ560？の綺麗なアーケイドに覆われた商店街であり。アーケイドのある商店街としては全国三番目の長さを誇る商店街だという。（一位は目黒区の武蔵小山商店街800？である。）おりしも大山商店街が共同で開いている「全国ふる里ふれあいショップ取れたて村」では東北の最上町の皆さんが、その場で新蕎麦を打つて試食会を開いていた。ただより好きなものがない素庵はさつそくそれを試食。新蕎麦の香り高い、腰の強いうまい蕎麦がありました。ここでは店頭で売っていた煮込み玉コーンヤクを買つた。商店街の評判の魚屋には客が群がっていたが、10きれほどの中トロ600円、イカの塩辛を買う。良い品が安い商店街であると思つた。

さて、古事記、太安万侖に関する小説、800字ほど書く。しかし、まだネットには流さない。少し書きためてから表示しようと思つた。

つていて。タイトルは決まらない。「ベッド・デテクティブ」小説
である。主人公は「酔いどれ詩人」
田沼遼である。

ベッド・ディテクティブ、ミステリー小説の元祖「時の娘」読み終わる。この小説で考証の対象にされているリチャード三世は、シェイクスピアによって「リチャード三世の悲劇」として1591年初演されている。そこで描かれているリチャード三世は残酷で、権勢欲にくられた、背中の曲がった奇怪な人物である。欧米人には、あらかじめリチャード三世には、このようなイメージがある。忠臣蔵はかの大佛次郎（素庵の尊敬する人である・猛烈な歴史書の読書家であることは、司馬遼太郎の先駆をなし、幕末の歴史、フランス史に詳しく『これはフランス語原書読み』、歴史への知識は膨大なものであった。丸善書店への借金を支払うために、しかたなく鞍馬天狗を書いたので、氏の本領は歴史家であった！）の、綿密な考証によつて成立した原作をもとに、1964年NHK大河ドラマ「忠臣蔵」が放映されて以来、今にいたるまで、あの手この手で作り替えられてきた人気作品だが、この登場する悪役、吉良上野介が、実はとても良い人で、濡れ衣で殺されたといつたら、日本人は誰でも「ええ？」と言うに違いない。この小説では、リチャード三世に対する伝統的イメージが崩されていくわけで、欧米人には、格別面白い作品ではなかろうか。このような作品がありながらリチャード三世は、いまだ重要な演目であるようだから、歴史通念には根強いものがある。

江戸川乱歩は、「時の娘」について、探偵小説評論家アンソニー・バウチャーが1952年度の最優秀作としているのに同感している。高木彬光は、これに刺激を得て「成吉思汗の秘密」を書いたわけだが、この作品は、正に傑作！ベッド・ディテクティブという小説形式が、いかに歴史文学に適しているかを示したといえよう。これは発見した素庵は、宝の山を掘り当てたような気持がするのである。この方式によれば紫式部も藤原氏も何でも書けそうである。

高木彬光作「邪馬台国の秘密」「古代天皇の秘密」アマゾンより届く。ともに送料込み251円。ともにベッド・ディテクティブである。「古代天皇の秘密」は、春野君が舌なめずりしている。なにせ「カルカヤの歌」の筆者だからである。春野一人はもちろん素庵のペンネームである。

朝方は小寒いが、日中は平年より暑い日が続いている。入手した「ダ・ヴィンチ・コード」は文庫本300ページほど上・中・下・三分冊である。面白くて、すでに上巻を読み切りそうである。「ダ・ヴィンチ・コード」を読んでいるのは面白さもあるが、これも一種の歴史ミステリーであるからだ。巻頭に以下の様に、挑戦的に書かれているのはすごい。

事実 シオン修道会は、1099年に設立されたヨーロッパの秘密結社であり、実在する組織である。1975年、パリの国立図書館が「秘密文書」として知られる史料を発見し、シオン修道会の会員多数の名が明らかになつた。そこにはニコートン・ボッティチエリ・ゴーダ・ダヴィンチの名が含まれている・・・。

ヴァチカンに認可された属人区（素庵注・地域を主体とした教会制度と異なつて、職業などによつて、地域を越えた種々のカトリックの分組織、代表者をもつ）であるオプス・デイは、きわめて敬虔なカトリックの一派だが、洗脳や強制的勧誘、そして「肉の苦行」と呼ばれる危険な修業を実施していると報道され、昨今では論争を巻き起こしている。オプス・デイは、ニューヨーク市のレキシントン・アヴェニュー243番地に、4700万ドルをかけて本部ビルを完成させたばかりである。

この小説における芸術作品、建築物、文書、秘密儀式に関する記述は、すべて事実に基づいている。

なにか、カトリックに、やねやわした動きがあるよつに感じられる一文である。

今日は記念すべき日付である。11・11・11である。つまり2011年11月11日である。これを期して、電鉄会社は記念切符を出し、恋人であった人々が結婚届けをだすという。結婚記念日を忘れて文句を言われる素庵などは、こんな日に結婚届けを出すべきであったのだ。さて、本日は国会で野田首相がTPP参加問題で野党から猛烈な攻撃にあつていた。そして午後八時過ぎ首相官邸において、参加についての交渉に入る事を明らかにした。素庵なども、この件に関しては、前に進めるべきだろうと思つてはいる。無関税になれば農業・牧畜業は海外の安い農作物との競争に晒される事は目に見えている。かといって工業製品輸出に高関税がかかる現状のまでは、国内の工場は、海外に流出する一方となるだろう。まして日本的人件費の高さは、諸国にくらべるとひどく高水準であるから、なおさらである。農業も牧畜業も工業も漁業も観光業も興業もサービス業も、産業は元気であつて欲しいものだが、やはり後退ではなく前に進む試練をうけなければ、良い方向には進まないのでないだろうかと思う。そうでなければ、いまの日本のひどい閉塞状況は打ち破れないのではないだろうか。

さて、古事記執筆者、太安万侶おおのやすすけについての創作、いまだ手つかずである。といつのも、ダ・ヴィンチ・コードの読書に入り浸つているからである。この後に、高木氏の「邪馬台国の秘密」・「古代天皇の秘密」も読まねばならない。その道の先に、素庵の作品が生まれてくると言つて予感があるのである。さて夕食、昨晚はおでん、今日はかきフライ・キャベツ千切り・缶詰のアスパラガス・もやし味噌汁・イカの煮付け、白菜ゆず漬け物、純米酒一合である。

11月12日(土)

「ダ・ビンチ・コード」読了。これから読もうと言つ人は以下の事を読まないほうが良いと素庵は警告する。なぜなら素庵は明らかにストリーに言及しているからである。（笑い）主人公が悪人の追跡を、才知ですり抜けて、与えられた地図をもとに辿り着いた場所で得たあらたに得た地図を守りながら、遂に宝にいたる、宝さがし探偵小説といったイメージだ。しかし得た宝というのが一円玉ぎつしりの宝箱だったと言つよくな、「なんだかなー」という初步的ミスを犯している小説であった。この本が、かくも読まれたのは、内容が漫画的であるからであろうか。これは売れたからといって良い作品とは言えない例である。いつなればミステリー やSFは謎で読者を引っ張つて行く一面がある。この作品では謎解明が全く不十分である。考えてみれば、作者のダン・ブラウン氏は、通常の作家なら、当然所持しているはずの結論の明確なイメージを用意していかつたように考察できるのである。素庵は、この作品に関して、こう言いたい「時の娘」を身よ！「成吉思汗の秘密」を見よ！と。さらによ、春野君の「鎌倉幕府第二代將軍実朝の青春」を見よ！と（これは手前味噌）。

さて、早朝から朝までに「ダ・ヴィンチ・コード」を読み終え、昨日の御飯が残っているので、御飯・生卵・ハム・昨晚のもやし味噌汁の朝ご飯とする。山の神は、そういうするうちお目覚め。今日は、三十代の出戻り息子、大田区協賛のオオタ・フェスティバルのスケボーコーナーのお手伝いということで、持つて行く500ミリリットルの魔法瓶に充たすべく、朝の分も含めてホットコーヒー1リットルも作らされる。（我が家はコーヒーメーカーなどはない。普通にドリップで作るのである）

大田区平和島周辺が会場であり、素庵夫妻も、40分ほどかけて

自転車で遊びに行く。（寝たきりにはなりたくない！健康のためにある）、地元の商店街、団体などが心をこめて出店していて、商業化した川向こうのわが市の工夫のない市民まつりには見られない魅力である。早速眼に入ったのが、原発の風評被害に遭つておられる福島の農業の皆さんのお店。愚庵・愚妻、安いものには眼がない、いずれも市価の半値！ジャガイモ・ネギ・玉コーン・ヤク・きゅうり・トマト・リンゴ・梨・インゲン・ほうれん草・会津まんじゅう・山ぶどう・ジャム・カブ・などなどたくさん買い込んだのである。およそ1キロにわたる会場を、荷物を持って歩くのが、身体に良かつた！（トホホ）。さて明日もやっているので近在の方にはおすすめであります。ぜひ福島の野菜を買ってくださいませ。P・S 買い込んだ野菜のうち、カブは肉あんかけにしたが絶品であった。

昨日は、太田フェスタ（大田区の区民祭）で、書き残した事がある。福島の物産コーナーで、しこたま野菜などを買い込んでから多量の野菜をぶら下げて、移動し、子供達のチアダンスを見た。子供はこのように活発に身体を動かすべきだと、素庵一人で納得している。昼に近い。次の会場では、つきたての餅で作った、あんころ餅（アンコも自家製）とおろし餅各200円を、わが山の神のために買い求める。素庵は焼き鳥4本400円と中サイズ生ビール300円、きゅうり一本漬け200円にて、最上のセルフ居酒屋を開店したのであった。さらに生ビールをお代わりした後、場所を移動、百人ほどが参加しているフリマを冷やかしたあと、さらに次の会場に、韓国の人々が開いている売店でチゲ300円（非常にうまい！）釜揚げ、さぬきうどん300円（本格的であり、これもうまい。味付け程度に少々の濃いつけがかかる）さて、最後はボートレー入場の方に移動する。ここでは、大森の海苔問屋が即売会を開いている。イベントに「海苔産地品定め」というのが行われており、野次馬のわが弥次喜多夫婦はこれにチャレンジする。三河海苔と有明海苔と江戸前海苔（東京湾・千葉・木更津・富津産）を判別するのである。人にはとりえがあるものだ、大食だけが芸だと思っていた山の神が、それを言い当ててしまった。素庵は江戸前が判別できたのみで、三河産と有明産を間違えてしまった。東京湾産は、風味がすぐれており、貧乏素庵家ながら、田頃、一点豪華主義で愛用しているから、（淺草仲見世通り近くに、淺草海苔の名店、いせ勘あり。台東区浅草1-36-2 享保）一年1717年開業の老舗で、淺草海苔=東京湾の海苔を鋭意販売している。生意氣にも素庵は、雨漏り家に住みながら、たまに買い求めるのである（味が解つたのであつた。ここで江戸前海苔全形10枚400円（通常560円）を2丈買い求めた。

さて、「ダ・ヴィンチ・コード」読み終えたので、今度は高木彬光作「古代天皇の秘密」を読み始めた。「成吉思汗の秘密」で有名な、神津恭介シリーズの一つである。高木氏の歴史に対する高度な思考力が、古代にどのような照明を与えていたか、期待大であり、楽しみは非常に大きい。

ついに、「ベッド・ティクティップ小説」をネットに載せ始めた。本当はもう少し時間が欲しいのだが、何となるかと見切り発車である。

昨日は、「ちい散步・北千住」編をたどって歩いた。水戸街道は言わずと知れた国道6号であるが、ここらあたりでは、旧道が残つていて、沿道には古い風情のある人家が残されている。横山家住宅・名倉医院は見応えのある建築物である。荒川に近い場所に美味しい「かどやの槍かけ団子」があり（一本90円・あんこ・醤油タレの2種類）・「ちい散步」にはないが、ケーキのアウトレットで評判のみせもある。上野の方からおよそ5キロ隅田川の千住大橋を渡つたところは、かの松尾芭蕉が、奥の細道を行くに際して門人・知人と別れた有名な場所である。ちょっと「奥の細道」の千住の部分を書き移してみよう。

一月二十七日夜明け方の空はおぼろに霞み、有明の月はもう光があわくなつておひ、富士の峰が遠く幽かにうかがえる。上野・谷中の方を見ると木々の梢が茂つていて、あの花の名所を再び見れるようになるのは、いつのことになるであろうかと心細い気持がする。親しい人々は宵のうちから集まって、一緒に舟に乗つて隅田川を航行し見送つてくれる。千住といつところで舟からあがると、これから三千里もの道のりをがあるかと胸がいっぱいになるのだった。この世は幻のようにはかないものであるから、未練はないさと思つていたが、ござ別れとなるとさすがに涙が溢れてくる。

行く春や鳥鳴き 魚の目に涙

これを、この旅で読む第一句とした。見送りの人々が別れを惜し

んでついて来るので、なかなか足が進まない。ようやく別れて、しばらく来て振り返ると、みんな道中に立ち並んでいる。私の後ろ姿が見える間は見送ってくれるつもりなのである。

誠に心にせまるシーンではなかろうか。

11月15日(火)

我が家は3LDKで長男は出戻りで同居で、次男家族はとなりの3LDK住んで、間の壁を抜いて一世帯家族風になっている。合わせて大人5人子供3人のめずらしい大家族である。孫3人は連絡通路から、しばしば進入して、こちらのリビングのソファーでゲームをし、かつてにジュースを冷蔵庫から飲んで暴れ時には素庵に蹴りを入れたりの悪行の限りをつくすのである。

さて、次男家族は土日にかけて千葉は勝浦に一泊旅行をした。泊まりの勝浦簡保の宿は、オーシャンビューホテルで、しかも特定の部屋には露天風呂がついてもいる。（その部屋の利用料は5千円増しだと聞いた）

おりしも、長男はオオタフェスタのスケボーハーナーの手伝い「アキ」さんとして土曜の夜は帰りが遅いので、つまりは素庵と素妻二人が、荒野のような我が家の中の片隅で「シズカダネー」とつぶやいているのみであった。次男一家は土曜日は「鴨川シーワールド」をチケットで安く利用し、日曜日「日本三大朝市」として有名な「勝浦朝市」に行つた。次男は重さ8キロほど、魚長40?ほどのカツオ（1500円）を、土産として持ち帰つてきた。今日の夜、素庵は素庵個人用の出刃包丁に砥石をあて、刃を研いで、やおらカツオに戦闘開始。朝市で内臓も抜いてくれるが、この土産は内臓を抜いていないもの、それだけ悪戦苦闘である。頭を落とし内臓を抜き、骨をさけ、三枚にわろし、身をガスコンロであぶり、タタキとした。これでやつとスーパーに売つて「カツオのタタキ」のサクとなつた。これを美しく切るには、ここからは刺身包丁を使う。完成！もう一つの土産である、大サザエの壺焼き（一コ250円とか）と一緒に食卓に出す。素庵はこれを魚に日本酒を大満足で飲んだ。

さて、例の「ベッド・ティテクティブ」以下、鋭意研究中である。

この日記は16日の早朝に書いている。だから本当は15日の日記なのだが、素庵は午後10時には寝て午前4時ごろに起きるといった毎日をくり返しているので、日記を夜に書けないで、翌日の朝に書いているので日記の日付が変になってしまつ。まあ、書かないよりは良いかと言うことで書いている。こんな駄文でも後日、何かの役にはたつであろうか。

昨日、素庵が食べた物を書いてみる。朝食は「ベーカリー・ピーターパン（大田区・京急六郷土手駅にショッピングあり）」の、フランスパンの生地で作られた食パンの八枚切りの一枚をトーストした物に、土曜日福島三春町の皆さんから買った「山葡萄ジャム」（美味！中瓶入り、680円）を塗つてたべる。それに昨晩の大根・ほうれん草の味噌汁と入れ立てのコーヒーを添えた。昼は、出勤途中に寄る、マックのセット250円也のホットドッグ＆ホットティーのホットドッグを残したものに、その後買ったセブンイレブンでのお気に入りサラダステイック（棒状にカットした人参・きゅうり・大根とキャベツ乱切りが、大コップ形のプラの入れ物に入つていて、味噌とマヨネーズをミックスしたと思われるドレッシングがついている。210円）をつけた。夜は近所のイオンのミニスーパー「マイバスケット」においてあるオリジナル、お買い得プライス商品「甘口カレールー」で作ったカレーに、同店においてある「生餃子」99円也を添える。お新香3割引品1パック。キリンのビール生発泡酒350ml1缶1本飲む。

素庵は日記に五行詩に創作に追われていながら、資料も読まねばならないから、バスで読む。電車で読む、マックで読む、昼休みに読むで本とデスマッチを常にしている。たいした才能があるわけではないので、寸暇を惜しんで読む・読む・読むの毎日をくり返して

い。これが楽しいのであるから、これを良しとする。

16日の記日がダブルなのだが、朝方、前の日の日記を書く、あと祭りばかりのグウタラ素庵は、ここら辺で、混乱をさけるため、17日の朝書いたことは16日とすることにした。それで今日の日付は2011年11月16日である。くどいようだが、この記は1月17日午前4時20分に書いているのである。それで、ここに言つ「今日」は昨日の事なのである。この言葉使いは、鎌倉時代の歴史書「吾妻鏡」の、語り口になんだか似ていて面白い。春野君の小説、「怒濤の歌。鎌倉第三代將軍実朝」執筆の時には吾妻鏡の原書と現代語訳を交互に取り出して、内容にあたつたものである。そこには・・・今日、大倉御所において・・・といったような表現が良く使われているのである。この書においても、この「今日」は、ほんとうの今日ではない。何年もあとに、書かれているのである。

さて、今日、東京は突然寒くなつた。朝方、市民公園の向こうの一分に一台は来る、まことに便利な市バス(この手前の交差点から各所からのバス路線が合流するので、こうした異常なことになつてるので、生意気にも素庵は混んでいるバスはバスとして座れるバスを選ぶのである。この時ばかりはこうした地の利を選んでくれた、今は亡き父に感謝するのである)の停留所まで五分強の歩行にも、厚手のジャケットを着なければ寒い陽気となつた。何でも日光・草津などにも雪が積もつたそうである。

高木彬光作「古代天皇の秘密」は、残念ながら、日本歴史学者の悪しき非論理的、似た地名・似た人名で推測を重ねすぎて、史実と違う方向に行つてしまつて、最後はなんだか、素庵の愚鈍な頭にはわけの解らないものに成つてしまつてゐるという印象が深い。やは

り日本古代は、かの賢学、野にあつて花を咲かせた「古田武彦」氏にはかなわないのである。古田氏にも若干は、こうした独断はあるが、独断する場合、大変慎重である。高木氏は「成吉思汗の秘密」で、冴えを見せていた推論が、ここでは生きていよいよと思える。「成吉思汗の秘密」ほど、調査が行き渡っていない印象である。高木氏は青森の出身で、若いときから「義経伝説」に親しまれて、関連の読書も相当なものであったと、自ら書かれている。この、知らずの内の調査が、「成吉思汗の秘密」の創作にあたり、下支えになつて、名作を作り出した要因となつたようである。氏の「古代天皇の秘密」、そつした背景がないので、物足りないものとなつてしまつてゐる。

朝食は昨日の残りのカレーに醤油をいれ、「和風カレー」となしで、茶碗御飯にかけたものである。飲み物は冷茶・ホットコーヒーである。コーヒーはこのところ、カリタの電動豆ひき機をつかわず、ひいてある安豆を使つていて。昼はコンビニのカップ蕎麦（128円）と竹の子総菜パック（105円）で質素。夜は、ネギを軽く炒めた後、牛肉をいれて焼き、醤油と砂糖で調味した中に、豆腐のみをいれた、ネギ・牛肉すき焼きといったものと、鰯の干もの焼に、酒・御飯で実にうまかった。

ボジョレヌボー解禁日である。もとより素庵、ワインのことなどは詳しくはないが、どちらの酒が好きかというのは、個人の好みの問題なので、対処できるのである。ここで、おろかな素庵の自慢話であるが、以前仕事で出入りしていた、私立女子校の行事の打ち上げの折、「私は、良い酒かどうかは余り良く解らないが、その日本酒が純米酒であるか、醸造用アルコールを混ぜたものであるかどうかなら、解る」と、用務職場の好々爺の長に、うつかり豪語したものだから「それなら、品定めをやってみろ」といわれてしまった。グラスに少しづつ入れた日本酒が三つ、用意された、このなかの一つが純米酒であるという。純米酒も醸造アルコール入りの酒も安酒ではない。飲み比べた素庵は、純米酒を言い当てた。メデタシ、素庵は恥をかかずに済んだのであつた。こういうと、素庵はよっぽど酒飲みと思うに違いないが、そうではない。「実朝」を書いていた頃、鎌倉に足繁く通っていたのだが、その鎌倉は御成通りに高崎屋という老舗の酒屋さんがあつて、折々に四合瓶入りの純米酒を買つただけの話なのだ。素庵はそれを夕食時に一合ほど飲むだけの人である。さて今日は、ボジョレヌボーを一本買い込んだ。一本は、高級スーパーで知られる「成城石井」のオリジナル2400円の品、もう一本は近頃都内に多店舗化している、イオングループのミニスーパー・マイバスケットの880円のオリジナルなんとプラボトル入りの品である。

晩ご飯は自家製太巻きである。材料は福島の農家から直送された新米とこちらで調達した山ごぼう（嘆かわしい近所の大型スーパーではあまり売つていない）・自家製卵焼き・赤でんぶ・きゅうり・甘炊き椎茸・江戸前海苔（木更津産）などである（うまい）。これを食していると、一種のボジョレを、山の神がキッチンでグラスにそそいで運んでくる。したがつて銘柄は解らない。エントリーは出

もどり息子・素庵・次男である。次男はまだ仕事から帰らない。色
合いは、良く似ている。味も良く似ている。熟成していないフルー
ティな味である。素庵は、普通の赤ワインのような濃い味のものを、
成城石井のものと判じた。長男も右にならえである。ハズレ、あつ
さりした味のものが成城石井のものであると、山の神の笑いものに
なった。おまけに「来年からは安いものでいいね」と曰われる始末
である。帰ってきた次男が、のちに部屋にやつて来て、「のみくち
があつさりした方が高いものなんだね。俺も間違えた」と言つので
あつた。

江東区の元木場を埋め立てて作つた大きな木場公園で山茶花がクリスマスツリーのようである。朝は昨日の晩ご飯の残りである太巻きと、冷茶・コーヒーである。朝食の前には日記をかいている。だいたい一時間ほど、それにかかる。素庵、だいぶ前に、永井荷風の膨大な日記「断腸亭日乗」を手に入れている。未だ一部しか読んでいないが、大変興味がある。少し読んだだけでも荷風の日記からは失われた江戸の情緒が伝わってくるのである。荷風の「墨東奇譚」「梅雨のあとさき」は読んだが、その他数多くの小説は、いまだ読んでいないが、読んでいないことが財産に思えるような氏の小説である。淺草などを歩くと、多くの店に「荷風先生」の来店を示す、記事などが張つてあることが多い。それを発見するのも楽しみである。

仕事、数日楽をしたので今日は忙しい。昼は上野の下谷のコンビニで買ったおにぎり鮭と昆布いり2口にペット入り温茶である。夜はカツ煮（カツ丼の上野部分を皿に盛つたものである）・御飯・きゅうりとブロッコリーのサウザンアイランドドレッシングのサラダ。イワシのつみれ汁・350㎖1発泡酒一缶である。

太安万侖の話、少し書く。古事記の序は、この話を書くにあたり、どうしてもしつかり書いておきたい。資料としているものは岩波文庫の「古事記」と河出文庫の「現代語訳 古事記」（福永武彦訳・福永氏は詩人・小説家であり、堀辰雄の弟子として知られ、堀辰雄全集を編纂している。小説「廃市」は大林宣彦監督によつて1983年映画化されている）であるが、愚鈍な素庵には、良く意味が取れない。遅々としながらも進むしかないのである。

朝三時起床。昨晩は九時には寝てしまったから、六時間以上は寝たわけである。お気に入りのテレビ番組「和風総本家」が、日本シリーズの延長によつて、放送時間が遅れてしまったので、早々に寝てしまつたので、早寝早起きとなつてしまつたのである。日記、太安万侖書く。朝食はホットケーキを焼き、ヤマブドウジャムとハムをそえる。珈琲・紅茶付きである。朝から暖かい雨が降つていて、十時までP.C.にへばりついている。今日は要介護3の母が入所している介護老人保健施設まで洗濯物をとりにいかねばならない。雨の中、片道2キロ、往復4キロを、運動のためにも歩いて移動する。90歳のこの母にはもはや言葉は通じない。かるうじて私が息子であることが解るだけである。ほぼ全員が座つている集合室の片隅に母もちよこんと座つている。声をかけると「あら、来てたの、用事があつたの」と、いつも言つようにしかものを言わない。返事をしても「座つたら」「何か食べる?」と、一方向からの返事しか帰つてこない。会話は成立しないのだ。したがつて早々に施設から退散して帰路につく。今日、こここの月費用6万4千円なりを支払うが、市より介護保険の還付金が1万5000円あるので月費用は5万円である。この費用も安いとは言えないが、普通民間老人ホームであつたなら20万円近くかかるようであるからかなり安い費用といえる。素庵の所得などたいしたものではないが、母が素庵の扶養家族のままであるのなら、このような施設でも倍は払わねばならぬはずである。母をわが家族から切り離し、わずかな年金収入の老人所帯とすることによつて、この費用ですんでいるのである。施設に入ることにも、テクニックがいる。母の場合は死にそうな肺炎にかかつて、入院して回復したからリハビリとして現在の施設に比較的順調に入れたワケなのである。このような認知症の老人をかかえる方には入院は施設にはいるパスポートであることを強調しておきたい。ちな

みに、ここの人所にあたり、保証金10万円を入金している。（退所時返還される）

ネットで午後一時十分より、駅前のシネコンに「素敵な金縛り」^{かなじば}を予約してある。「素敵な金縛り」は、人気監督の三谷幸喜脚本・監督作品。主役に「悪人」で好演の深津絵里、金縛りする武者の幽霊に西田敏行を配している。すでに公開から三週間を経ているが、三週間の興業成績は第一位であるといつ。内容は、ある殺人をめぐつての検察と三流弁護士と落ち武者幽霊を交えた法廷ミステリー・コメディである。笑いあり・なみだホロリありの、良くできたコメディーに仕上がっている。

映画前に「ドンク」にて、ランチを買う。フランスパンに鮭・タマネギ・チーズ・マヨネーズを挟んだサンドイッチにアイスティー各一人前しめて千円以内である。映画のあと四時過ぎ、チエーン寿司店（回転寿司ではない。本マグロをさばく店で夫婦一人で飲んで食べて7千円で済む、リーズナブルな店である）に入り夕食とした。生ビール・冷酒・ハイボール各一杯飲む。したがって、読書も執筆ならずテレビ「アド街ック天国」草加編をボウと眺めるだけである。そして今日も午後九時就寝のよい子となってしまった。

昨晚、九時過ぎに寝てしまつたので、早朝三時に目覚めてしまつた。例によつて日記、「太安万侖」筆。

昨晚の「アド街ック」草加編に早速刺激されて、草加に行つてみることにした。草加は先日の大光街道（国道4号）の千住をさらに北上した街である。淺草から出ている東武伊勢崎線の草加駅で東口から降りる。降りて左側の交番の近くに、おせんべいを焼いているおせんさんの像がある。おせんさんの像の前を東に少し行くと綺麗な歴史散策道が完成した草加駅前一番通りが北に向かつていて。十分ほど行くと、歴史民俗資料館がある。ここには江戸時代の草加宿を再現したジオラマや農家の数々の道具や映画館の映写機やSPレコード（かの、78回転のぶ厚い初期のレコード盤である）の蓄音機などが懐かしい。とりわけゼンマイ式の蓄音機は素庵を狂喜させた。ここの大光館は、さわつて体感する展示主義なようで、多くの陳列物がさわれるようになつていて。蓄音機には「アカトンボ」のレコード盤が置いてあり、ゼンマイの巻ハンドルを40回巻いて、レコードに鉄針を乗せて再生するまでをやらせてもらえたのである。おお、懐かしい美音がスピーカーから流れて来るではないか！しかし、しかも鉄針交換までさせてもらえた。（針は三回の再生で一回取り替えなくてはならないそうだ）うそでなく、電蓄がほしくなつてしまつた素庵である。素庵の好きな、かの有名詩人中原中也はシーベルトやモーツアルトをこのよつた装置で楽しんだに違いないからである。山荘などで、この再生装置で音楽を聴きながら、創作に打ち込めたらどんなに良いだろ！さて、この道「歴史散策路」をすすむと、やがて旧日光街道に出る。この通りには「草加せんべい」の老舗がたくさんある。意地汚い素庵ならびに鬼妻は、我が家の財政をかえりみず、あの店、この店で「草加せんべい」買いまくつた。一枚ずつ（百円）かじつてみると、さすがに良い醤油（各店はそれ

ぞれ違う醤油醸造元と契約しているとか）・良い生地・天日干し・炭火焼が実際に良い味を作り出している。さて、この道筋には、観光客のために、お茶をだしてくれる無料休憩所もある。さらにその先には、江戸時代の日光街道を忍ばせる、松並木が1キロにも渡つて続く。それに今日は赤く紅葉した周辺の桜の樹がキレイだった。春にはこの周辺の桜は景観であるそうな。松並木の最後のあたりに、東武伊勢崎線の松原団地駅があつて、3キロぐらいの手頃な歩行で済むのも良かつた。コースの最後近くに草加市文化会館があつて、ここでも各店の草加せんべいと、もう一つの名物である見事な革工芸品が売られていた。（今日は千円で入場できるハープ演奏会も開かれていたが、時間の都合もあり、残念ながらパスした。）

「ルパン3世」の原作者・モンキー・パンチは、少年の頃、トムとジエリーが好きで、作品に、その追っかけを真似ていれたと、今晩のテレビで知った。素庵、これで納得。そうか、「ダヴィンチコード」も、基本的には善玉を悪人が追いかけるという、漫画の基本的パターンなのだとthought。結局の話、SFでいえば、謎ときて終わらない長編物語みたいなもので、当然物足りなさが残ってしまうのである。トムとジエリーは素庵も孫とともに、数多く見たが、時を忘れる面白さがあった。これを悪いというのではないが、大人の見るものとしては不十分と言えよう。追っかけとセクシーとスリルは大衆映画に欠かせない3要素だと聞いたことがある。「ルパン3世」には、この要素がしつかり盛り込まれていたと思う。ミステリーとSFは良く似ているといわれる、謎が徐々に解明される面白さ。そして意外な結末。これは歴史ミステリーも同じではないだろうか。素庵はSFなら相当読み込んだと言えるが、ミステリーは初心者である。したがつて、ここで余り無駄口を言えない。せつかく届いたコナン・ドイルのホームズシリーズ「まだらの紐」がルビの振つてある「少年文庫」であつたから、（アマゾンで1円配送料250円はこの本だけだったのだ。素庵がこの本を電車で開いているのを見たらどう思うだろうと考えると、とても愉快である）小学六年生にもなつて、本を読まない男孫を本の世界に引きずり込むべく、この本を読んで感想文を書いたら三千円やる」などといつて本をうつかり与えてしまつたので、ミステリー修業の道は遠のいてしまつた。これでは今は亡きミステリー界の有名遊歩人「植草甚一」さんに遙かに及ばないままである。

さて、今日の食事であるが、朝はハムエッグ・トースト・コーヒー。昼はコンビニのミニドッグ2コ190円にストレート缶コーヒー。先日の草加せんべい一枚。夜は回鍋肉（ほっこりゅう）（キャベツと豚肉の芥子

味噌いため（と鯖の塩焼き・もやし味噌汁・竹輪と野菜の煮物・酒
なし・御飯・冷茶である。酒抜きだと、こんなに御飯が美味しいくて、
眠くならずにパソコンに向かっていられていいなあと思つたが、
酒をやめられないのは何故であろうか。

明日は祭日なので、軽バンによる配達、非常に忙しい。今日は品川区・港区・台東区・文京区・荒川区・足立区・葛飾区・墨田区・江戸川区・江東区・中央区の順で回る(この順番は順路の都合で毎回変わる。ちなみに前の日は大田区・田黒区・世田谷区・渋谷区・新宿区・中野区・杉並区・練馬区・豊島区・板橋区・北区などの東京23区の西半分を回るコースである。23区を半分にわけて一日ごとに回るのである)。今日は千代田区の会社から注文がないので千代田区の配達はなしである。社を十時半に出て、昼は台東区下谷のコンビニで買った、太巻き・いなり寿司セットとペット冷茶380円+120円でしめて500円なりである。走りながらの素敵な昼食である。(朝食はトーストに生ハムを挟んだ物と、コーヒーであつた)。やつと五時半に中央区で配達終わる。今日はわが町内の親睦会の無尽が午後七時よりあるので、築地より鈴ヶ森まで自費700円を支払って首都高速に乗り帰りを急いだ。無尽のあと、韓国カラオケスナックを会員に勧誘するといつので、役職である素庵も欠席というわけにはいかないのである。酒を飲みながらの交渉であるから、今日は創作なし。日記は翌朝に書いているのである。料理はキムチ風ナントカ料理で何を食べたか印象が残っていないが、焼酎の抹茶割りを何杯も飲んだ。

今日は勤労感謝の日で、素庵も感謝されてお休みである。朝方、四時より「太安万侶」筆。「素庵日記」昨日の分書く。午前中、山の神は仕事あり。朝食は昨日の残りのキムチ鍋。素庵、昨晩はキムチ漬けであったのに朝もまたキムチで、韓国人になつたみたいである。（しかし、「カルカヤの歌」の作者であるから、韓国人の人より韓国の大歴史にくわしい素庵だから、それも良いか。素庵韓国には行つたことがなく、いつかは任那のあつた韓国南岸部釜山のあたりを周遊したい気持がある。・・・おかげさまで、「カルカヤの歌」、いまだに毎日20人ほどの方が読んでくれているようで、感謝しています・・・）昼、山の神、帰来。素庵、冷食の中華丼の素を鍋で暖め、レトルトを切り、御飯に乗せて昼飯とする。午後2時、二人そろつて自転車にて2キロほど離れた駅前に向かう。遊びを兼ねた買い物である。日頃、素庵の履いているアシックスのシューズ、もとは白銀色であったが、今や汚い灰色に変身してしまつていて、恐い山の神に三拜四礼して、新しいシューズを欲しがつたのが功をそうして、買つてくれる事となつた。したがつてニユーバランスの豪華絢爛、素庵にはもつたいたいシユーズが手に入つた。愚息に言わすとニユーバランスの1500という定価2万円ほどの良い品だと言つことだ。（もちろんケチな素庵のことだ、ただでは済まない。バーゲン値でショッピングセンターのポイント4千円分あり、お店の千円引き券まで使つたから実際愚妻が財布から出した金は8千円であつた！）もし、素庵が駅で行き倒れになつていても、今銀鼠のシユーズではホームレスが酔つぱらつて寝ていて見られかねず、誰も救急車など手配して紅で、命取りになる可能性大であるから、この出費は必要経費である。（笑い）

3歳の孫娘が、千円のクリスマス用の組み立てチョコレートの家が好きなので、クリスマス用ではなく、通常のおみやげとして買つ

た。 そうして夕食の食材と午後のお茶菓子としてズンダ持ちを買い込んで四時頃帰宅した。 夕食は焼サンマ・大根おろし・白子干し・ベーコンとほうれん草のバターソテイ（今、震災の影響でバターが品薄で高い！通常サイズの物が380円であるが、素庵家はチャーハンとトーストに小量使うので欠かせない。 やはり風味はバターである）あとは、イカリングフライ・御飯・大根の味噌汁・酒なしである。

「成吉思汗の秘密」の作者高木彬光のベッドティクティブ小説としては第二作目である「邪馬台国の秘密」を読み始めた。これは、手応えとしては、三作目の「古代天皇の秘密」よりもずっと良い感じであり、この先が楽しみである。孫はコナン・ドイル「まだらの紐」を読んでいるだろうか？

その後の事を聞いていない。読ませていると言つことで、思いついたのだが、わが愚息が読もうとしている、山本一力作の「損料屋喜八郎始末控え」（2005年、文芸春秋刊）に登場する悪徳札差（ふたさし）旗本への金貸し。膨大な利益を手にし、江戸文化の花と歌われた。歌舞伎のスーパースター、助六がこの札差である）笠倉屋は、素庵と濃厚な関係がある。この笠倉家は素庵家と親戚である。素庵の母の母（祖母）の妹が、笠倉家に嫁いでいる。この祖母の妹の夫（つまり笠倉氏）が素庵の父と母を結び合わせた。（妻の姉の、その娘を知つている家に紹介したということである）つまり、素庵は札差の運命が一つ狂えば、素庵はこの世に存在しないという幸せな歴史的事態が招来されたであろう！この笠倉屋はどうやら幕末まで札差を稼業としてきたようであるが、札差がなくなつた明治に入り、淺草の木馬亭のオーナーとなつたと言つことだ。幼少期の素庵は、この家に出入りしていたが、そんなことは全然知らなかつた。ただ、「偉い武家であつた」と、聞いただけであつたのだ。

祖母の妹の連れ合いのこの人は「笠倉知栄」^{かさくちゆう}といい、かなり先駆の写真家で昭和初期に文京区団子坂に写真館を開き、フォトグラファーとして、かなり作品をのこしている。川崎市民ミュージアムには、大型写真機と300枚のデジタル化された銀板写真がのこされている。これはネットで見ることはできない。ミュージアムに行くには南部線武蔵小杉駅よりバスが出ている。ちなみに、この美術館

は川崎フロンターレの本拠地のとなりにある。館内にしつかりしたレストランもあるから秋の一日の行楽にはおすすめである。・・・知栄さんは、木馬館主であった、その父（幼かつた素庵は長い白あご髭で禿頭のこの人を見ると泣いたという。小学生になつた素庵はもはや、そんな事はなくなつたが・・・）に、「みつともないから勤め人になんかなるな！」と言つたという没落貴族的な人であつたから、知栄さんは、昭和初期では珍しい自動車運転の教師をやつたり（今でいえば飛行機の運転教師と言つたところであろう）大型外国製カメラを手に入れて（今の値段で言えば一千万円はしたと思われる）写真撮影稼業をしたりの不思議な人生を歩んでいる。

今日の食事。朝はホットドッグ。長いウインナをゆでた後、湯からあげてフライパンに油少々でウインナを炒める。ドッグ用パンはオーブントースターで軽く焼く。パンの内側に、フランス製の「マイユ種入りマスター」を塗つたのちレタスと前記ウインナを挟み、ケチャップ少々。これにコーヒーと前の晩のアサリの味噌汁をついた。ホットドッグはまじめにつくるもので、やはりうまい。昼は「ナチュナル・ローン」の店内調理のピザ一切れ（280円）に、店のマシンによるホット珈琲ストレー（160円）である。夜は町内の親睦会の皆さんと食事会。近所のこじんまりした「レストラン・ガーリック」を借り切つての会である。（満席でも20人ほどしか入れない店である）メニューは赤ワイン・生ビールにチーズ・クラッカー・牡蠣・フィッシュフライ・サラダ・トマトスープ・ガーリックトースト・ハンバーグである。的を得た良い料理である。近場に、このようなキッチン風の店があることは良い事である。

飲み過ぎ。今日は創作なし。

山の神が、勤め先の方の方から、一昨日、比内地鶏のキリタンポ鍋（秋田名産）の二人前鍋セットを頂いた。昨日は、素庵飲み会であつたので、山の神にも三分の優しい魂があつたのだろうか、今晚の菜として残してくれた。しかし大食の愚息もいるので、さらにネギ・水菜・キリタンポ・シラタキ・ゴボウ・マイタケ・鶏肉・水菜を買い増して料理に突入した。まず醤油・砂糖の鍋つゆを沸騰させる。次にゴボウ・シラタキ・マイタケを投入して中火で五分煮る。次にセリ・水菜を入れ一分煮る。いよいよ鶏肉・ネギ・セリを投入五分煮て火を止め調理終了。この調理は成功。鶏肉は柔らかく、ジユーシイでネギ・セリは香り高く、実に満足の味でありました。その他の物としては御飯はなし、酒抜き、白菜のお新香付でした。昼はコンビニのサンドイッチ（190円）に、ポンジュースの粒入りオレンジ360㎖（160円）である。素庵、多少メタボであるからカロリーを気にしているのである。朝は、昨日の鍋汁に御飯、卵を入れて雑炊とした。これに冷茶・コーヒーをつけた。しかし、何か蕎麦が食べたくて駅でかけそばを食べた。（280円）也。

さて、高木氏の作品「邪馬台国の秘密」には、歴史研究者が考証をすすめるにあたつての心がけねばならぬルールが書かれている。

一 後代の地名が似ているからと言って、それが古代の地名と安易に同一と定めてはならない。二 歴史資料の年号や単語を安易に間違いであるとしてはならない。・・・このような事は、トンデモ本の作者に聞かせてやりたい。高木氏の歴史小説は、このような姿勢が保たれているのである。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5504x/>

素庵日記

2011年11月26日19時02分発行